

## OBSERVATIONES AD FLORAM FORMOSANAM. VIII.

(Continuatio ab voluminis V. No. 2 pag. 184)

Yoshimatsu YAMAMOTO

(Received for publication September 15, 1933)

(55) *Amorphophallus* (Sect. *Dysamorphophallus*)  
**Niimurai** YAMAMOTO, sp. nov.*Amorphophallus hirta* (non N. E. BROWN) YAMAMOTO, in Journ. Soc. Trop. Agr. Taihoku Imp. Univ. Formos. V. (1933) No. 2, p. 180, fig. 7-A. B.

NOM. JAP. Usuge-konnyaku (nov.)

HABIT. In Horto botanico nostro (cult.), floruit Maio 1933.

DISTRIB. In Formosa endemica.

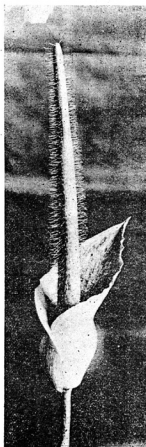
(56) *Amorphophallus* (Sect. *Dysamorphophallus*) *hirta* N. E. BROWN (Fig. 8) in Journ. Linn. Soc. XXXVI. (1903) p. 181; MATSUM. et HAYATA, Enum. Pl. Formos. (1906) p. 458; HAY. Mater. Fl. Formos. (1911) p. 373; ENGL. in Engl. Pfl.-reich 48 Heft. (IV. 23 C) (1911) p. 67; SASAKI, List Pl. Formos. (1928) p. 95.*Observatio.* Tuber subglobosum, apice ad centrum radiato-radicans. Folia ignota. Scapus cum spadice circ. 1 m. altus, e centro summi tuberis oriundus, pedunculo atro-viridi carnosio laevissimo 6 dm. longo circ. 1.5 cm in diametro basi bracteato; bracteae 3, membranaceae, pallide virides vel purpurascentes, viridi- vel purpureo-maculatae, basi amplexicauli-vaginatae, inaequali-longae; externa brevior, ovata, 5 cm longa; media 11 cm longa; superna longissima 25 cm longa. Spatha inferne convoluta-obconica, superne labiata, transverse expansa, conico ollaeformi 6 cm longo 6 cm in diametro basi obtuso superne contracto extus viridulo intus atropurpureo verruculoso; lamina inferne campanulata, superne ovato-triangularis, 20 cm longa, 12 cm lata, apice acuminata, margine undulata, extus viridescens, intus rosao-viridis, glabra. Spadix

Fig. 8.

*Amorphophallus hirta*  
N. E. BROWN; habitus  
inflorescentiae.

ignoti. Fructus basi bracteis et sepalis obtectus, globosus, 3-lobatus, 3-locularis, in loculis 1-4-ovulifera. Ovula 3-12, oblonga, compressa, in apice loculi pendula, 1.2 mm longa, 1 mm lata, rubescentia. Styli 3-fidi, fidis filiformibus revolutis apice stigmatibus. Semina albuminosa.

NOM. JAP. Hisakaki-modoki (nov.)

HABIT. In mont. Pianan, ad 6300 ped. alt. (leg. Y. YAMAMOTO, 3 Nov. 1928 (ramus ♂ -florifer); mont. Taiheizan, (leg. S. SUZUKI, 16 Julio 1929, No. 370, ramus fructifer); mont. Bombonzan, (leg. E. MATSUDA, 1 Aug. 1918); mont. Arisan, (leg. NAKAZAWA, Julio 1919); monte Bonbon, (leg. E. MATSUDA, Aug. 1918, No. 457 T.)

DISTRIB. Planta haec in Formosa endemica est; in partibus montium centralium spontanea.

(66) *Viola shinchikuensis* YAMAMOTO, sp. nov.

Caulis basi rhizomatoides, crassus, perennis, petiolis cum stipulis imbricatis insturctus, (radicibus fibrosis elongatis), superne saepe elongatus, erectus, 6-7 cm longus, simplex. Stipulae castaneae, lineari-lanceolatae, 8 mm longae, 1 mm latae, margine fimbriatae, fimbriis longi-filiformibus. Folia radicalia cordata, apice acuta, basi profunde cordata, margine serrata, 1.5 cm longa, 1.2 cm lata, pagine supra glabra, subtus ad costam venasque hirsuta, petiolis circ. 2 cm longis. Folia caulina foliis radicalibus fere minora. Pedunculus axillaris, e caule evolulus, 1.5 cm longus, basi bracteatus, bracteis linearibus 3 mm longis 0.5 mm latis basi laxe fimbriatis castaneis. Flores ignoti. Sepala 5, persistentia, lanceolata, extus dense pubescentia, inaequali-longa, longiora 4 mm longa et 1.2 mm lata basi auriculata, auriculis apice 3-4-lobatis; breviora 3.5 mm longa et 1 mm lata basi auriculata, auriculis apice 2-lobatis. Capsula trigono-elliptica, 6 mm longa, 3.5 mm in diametro.

NOM. JAP. Shinchiku-tachitubosumire (nov.)

HABIT. Monte Yura, ad 1500 ped. alt., praef. Shinchiku, (leg. Y. SHIMADA, 14 Aug. 1925 No. 2390 C); praef. Shinchiku: monte Mentoyu, ad 3000 ped. alt., (leg. Y. SHIMADA, 15 Aug. 1925 No. 2391, C).

DISTRIB. In Formosa endemica.

(67) *Viola oblongo-sagittata* NAKAI, in Bot. Mag. Tokyo, XXXVI. (1922) p. 37.

var. *violascens* NAKAI, in Bot. Mag. Tokyo XXXVI. (1922) p. 37.

form. *Ishizakii* YAMAM. form. nov.

Folia minora, glabra, spatulata, petiolata, 2-2.5 cm. longa, 5-6 mm lata, apice obtusissima, basi truncata vel angustata, margine crenata, petiolis 1.5-2.5 cm longis glabris. Flores ad apicem pedunculi elongati, 11 cm longi, solitaires, majores, 2.3 cm in diametro. Petala 5, subaequalia, obovata, 17 mm longa, 7 mm lata. Calcar 7 mm longum.

## 臺灣植物考察 (第八)

(第五卷 第二號 第八十四頁より續き)

山 本 由 松

## 摘 要

(55) **ウスゲコンニヤク** (*Amorphophallus Niimurai* YAMAMOTO, sp. nov.) は余が前號 184 頁に *Amorphophallus hirta* N. E. BROWN に當て、發表したのであるが其の後 *A. hirta* の原記載と全然一致せるものを得たので、前にも附記した通りこれを訂正して上記の新種名を附した。このものは *A. Henryi* に外観似て居るが花部を克く観察すると、雌蕊の柱頭は *A. hirta* と同様であり、又雌雄花の間隙に Appendix には、毛様突起體が、極相であるが生じて居る點で區別される。それ故に Engler 氏の *Sectio Disamorphophallus* に入るべきものである。*A. hirta* とは銀白色の毛様突起體が極相に有する事、總花梗は短小であり、Appendix も短かいので其の區別は極めて明瞭である。こゝに吾々は同じ *Sectio* に今一種を加へたわけである。

(56) **ケコンニヤク** (*Amorphophallus hirta* N. E. BROWN) は正宗殿敬、大沼三郎兩氏はれを恆春、タラルに於いて採集し、塊根を植物園に栽培されたものである。最初は前者と同種なりと見て居つたが總花梗は著しく伸長し、數日にして全長 1.5 米突に達した。そして Spadix は綠色心臟形で、Appendix は極めて長く、ことに暗紫色の毛様の突起體は、恰も總花梗に密生して居て外觀は全く異つて居る。Engler 氏の所謂 *Sectio Dysamorphophallus* に入るべき珍奇な植物に屬する。この植物は雌蕊先熟でこの時期になると一種異様の臭氣をあたりに發散して居る。そして盛に總花梗が來て蜜卵をする。やがて Spadix も萎れて來る頃になると初めて雄蕊は成熟して花粉を出すのが見られる。同一の植物は高雄州下の山地から持來り (農藝化學教室) 又佐々木舜一氏亦臺南州斗六に於いて採集せりと報知されて居る。

(57) **オホミノナガエサカキ** (*Adinandra obtusissima* HAY.) は早田博士が鑑定され未發表のまゝとなつて居たものであり。次いで佐々木氏は是れを林業部の腊葉館の植物目錄に始めて轉載され、全然未記載のまゝで今日に至つた、挿畫にも示してある通り極めて著しい種類である。

(58) **タイワンヒメツバキ** (*Camellia gracilis* HEMSL.) は一名タイワンサザンクワとも云つて、臺灣の中南部の山地に産する。今度吾々は臺中州蓮華池で採集した。完全な標本を得たのを幸に觀察點を記載した。一見 *Eurya* に類するものがある。

(59) **アリスンヒサカキ** (*Eurya arisanensis* HAY.) は初め早田博士は其の著 *Icones Pl. Formos.* VIII. p. 6, fig. 4 に發表されたものであるが佐々木氏の目錄には除外されて居る。これは恐らく *E. Matsudai* HAY. と混同されたのでないかと思ふ。私は其の葉の形態からでも明に區別されると信ずる。即ち後者は側脈は上面に隆起し、其の数も多くて直に區別出来る事、勿論原記載からは、前者は花瓣の上縁は波状を呈する事、子房は有毛なるによつてもその特長は明瞭なので、再び種の確立を奨励せんとするものである。

(60) **タイワンヒサカキ** (*Eurya Hayatai* YAMAMOTO, sp. nov.) は松田英二氏はれを大武山に發見し、早田博士は *Eurya hirtanensis*? と鑑定されて未發表となつて居たものである。葉の形はモツコクに似て居るが決して叢生して居らないし、又花は全く *Eurya* 屬である。該標本は雄花を帶けた雌株で雌花は無い。同博士の名に因んでその種名とした。

(61) **フトミノヒサカキ** (*Eurya Matsudai* HAY.) は松田英二氏初めて武威山に採集し、早田博士の命名されたものである。正宗氏は同博士の *Cleyera Matsudai* HAY. (未發) と混同し、これを *Sakakia Matsudai* (HAY.) とされたが原記載と挿畫からは全然異なるもので決して *Sakakia* でなく、正しく *Eurya* である。私は種の嚴然たることを再唱するものである。

(62) **ヒロハノアツバヒサカキ** (*Eurya Suzukii* YAM. nom. nov.) は鈴木重良氏初めて大平山に採集し、アツバヒサカキに似た葉の廣いものに其の一變種として (*Eurya glaberrima* var. *acuminata* SUZUKI) 發

表せるものである。これはアツバヒサカキと全然異なり、否寧ろヒサカキに似たものと思ふ。然し葉の先端は尾狀披針形であり、ことに基部は鈍形又は圓形をなし、鋸齒の細小にして多いこと又葉脈の脈が全然異種として認むべきものと考へ、こゝに鈴木氏の名に因みと新種名とした。この際 *E. acuminata* なる種名は既にあるので改名することにした。

(63) **マツダサカキ** (*Sakakia Hayatai* MASAM. et YAMAMOTO, sp. nov.) は早田博士は *Cleyera Matsudai* として未發表のまゝで居たものであるが *Sakakia Matsudai* MASAM. の一部はこの *Sakakia* 屬に入るべきものである。こゝで吾々は *Sakakia* 屬の一新種としてこゝに發表する。サカキ (*Sakakia ochracea* NAKAI) に酷似した植物で臺灣のサカキと稱するものは恐らく、このものでなからうか思はれる。

(64) **ナガミノサカキ** (*Sakakia longicarpa* YAMAMOTO, sp. nov.) は島田彌市氏が次高山海拔 2100 米の高地で發見せるものである。サカキに酷似して居るが葉は凡て鋸齒縁なる事、果實はネヅミモチの様に長形であり且つ永存性の萼には纖毛のある事及び長梗を有するので區別される。

(65) **ヒサカキモドキ** (*Pseudoecurya crenatifolia* YAMAMOTO, gen. et sp. nov.) は一見 *Eurya* 屬の如く葉は小さくて丸い點は彼のツダヒサカキ (*Eurya japonica* var. *microphylla* MIQ.) を髣髴たらしむる。然し花は小さく、雄蕊は常に 5 本である事、(これは *Ternstroemia* 屬に補正すべき特長であると考へる)、又果實は是又小形で 3 室であり、種子は完全に發育すれば各室 4 個で都合 12 個出来る。胎子が各室の上端に發育せる Placenta から下垂して居る處は *Ternstroemia* にも似て居る。以上の特長は他の屬を考慮するならば本科中に於いて新屬設立に充分であると考へる。即ち *Pseudoecurya* とし、以上の特長を有する只一種 *P. crenatifolia* sp. nov. をこれに所屬せしむるものである。

(66) **シンチクタツツボスミレ** (*Viola shinchikuensis* YAMAM. sp. nov.) は新竹州ユラ山海拔 1500 尺の山地で島田彌市氏の採集せるものである。外観はタツツボスミレ (*V. grypoceras* A. GRAY) を想起せしめるが葉は著しく狭長で線狀であり、又鋸齒も著しく線狀に伸び、花梗の苞も又線狀であつて著しく又萼片には細毛の密生せるを特長とする。或はタツツボスミレの一變種とも考へられるが花のある完全な標本を得た後に譲る。

(67) **オホバナヤノネスミレ** (*V. oblongo-sagittata* NAKAI var. *violascens* NAK. form. *Ishigakii* YAM. form. nov.) は阿里山の塔山に於いて石蓮君の採集せるものである。タイワンヤノネスミレに似たもので、葉は小形で花は大形、ことに花瓣は廣くて美事なものでこれをその一品種と見做した。

(68) **ウスバシウカイドウ** (*Begonia bui-montana* YAMAM. sp. nov.) は松田英二氏初めて武威山に發見し、次いでヒラン山にも採集した。タイワンシウカイドウに似た葉形をして居るが質は薄くて幅は廣く且つ頂上には藍色の色が密生するを以て區別される。(全形は Nova Guinea 産の *B. Malmquistiana* IRMSCH. に似た植物である。

(69) **ウシタキサウ** (*Circaea cordata* ROYLE) は臺中州マレットバなる蕃地海拔 6000 尺の高地で佐々木舜一氏の發見せるものである。これはヒマラヤの海拔 7-8000 呎に生ずるものと同様である。我が國では北は北海道から、本州、四國に亙り生ずる彼の *Circaea cardiophyllum* MAKINO なるものが是れであると考へらる。従つてこの植物はヒマラヤから滿洲へ、それから北は北海道から南は臺灣まで廣く分布して居るものであるから地理的分布上、ヒマラヤ系と見做されるものである。因にヒリクピンには *Circaea* 屬は未だ發見されて居ない。こゝに臺灣の Flora に 1 種を加へたわけである。

(70-71) **テラガンチトリモチ** (*Balania Kudoi* (YAM.) YAM. comb. nov.) 及び **タロコツチトリモチ** (*Polylethia Oshimae* (YAM.) YAM. comb. nov.) は何れも從來 *Balanophora* に所屬せしめて居たが今度 VAN TIEGHEM 氏の *Balania* (1907) 並に *Polylethia* (1896) に各々改めたのである。尙ほ從來の *Balanophora* 屬に就いては研究吟味すべき點があると思ふ。何れ又筆を更めて發表することが出来よう。(續く)

(昭和八年九月十五日)